多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト実行委員会

多摩・島しょ広域連携活動助成事業

4 years
みんなの想い。

タマリズムプロジェクト

令和３年度 - 令和６年度

多摩地域マイクロツーリズムプロジェクトとは？

「タマリズム」ってナンだ?!

[What is Tama micro tourism project? - Tamarism -]

令和３年４月、新型コロナウイルスが地域経済に与えた影響を打破し、地元の魅力を再発見することで持続可能な地域活性化を目指す、都内初の産官学民連携プロジェクトとして始動した「多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト」（現在の呼称は「タマリズム」）。

コロナ禍とアフターコロナの時代を見据えてスタートした「タマリズム」は、多くの自治体や企業がマイクロツーリズム推進の取り組みを実施する中、多摩地域・郊外都市の課題に焦点を当てた「観光まちづくり」をテーマとし、次世代を担う大学生などにより構成したチームを対象に、地域課題の解決や地域ならではの魅力に焦点を当てたマイクロツーリズムの企画を公募。４年間にわたって毎年、事業化を目的としたコンテスト / ドラフト会議を開催してきた。

「タマリズムコンテスト」には趣意に賛同する産官学民が多く集い、大学や自治体、企業の枠組みを超えて学生のアイデアをブラッシュアップして事業化に至る企画も多くあった。

『4years みんなの想い。』と題した本誌でこれまで「タマリズム」に関わってきた大学教員、自治体、民間企業ーー立場の異なるさまざまなプレイヤーへのインタビュー取材を通して「タマリズムプロジェクト」へのみんなの想い、その全体像を浮き彫りにしていく。

実施体制 organization

実行委員会事務局

多摩市
市民経済部経済観光課

稲城市
産業文化スポーツ部観光課

多摩大学
総合研究所

京王観光（株）
団体旅行営業部
戦略プロモーション室

八王子市
産業振興部観光課

日野市
産業スポーツ部産業振興課

町田市
経済観光部観光まちづくり課

後援

観光庁、東京都、東京観光財団、東京都商工会連合会多摩観光推進協議会

目次 Index

p2-3 … 「タマリズム」とは？ / 実施体制 / 数字で紐解く「タマリズム」
p4-7 … 令和３年度 ～ 令和６年度「タマリズム」実施報告
p8-9 … 多摩大学 × 京王観光　実行委員会事務局に聞く、「タマリズムへの想い」
p10-11 … 多摩市×稲城市×日野市×八王子市×町田市
「タマリズム、ここが良かった / 苦労した」
p12 … “ 学生の声 ” まとめ
p13 … 多摩観光推進協議会が考える「タマリズムの可能性」
p14-15 … 一般社団法人町田市観光コンベンション協会 /
グラン・グルメ株式会社 / 多摩信用金庫
p16-17 … 神奈川大学 / 亜細亜大学 / 東京工科大学
p18-19 … 「みんなの想い」を次のステージへ

Tamarism in NUMBERS

数字で紐解く「タマリズム」

産官学民連携プロジェクトとして始動した「タマリズム」は、さまざまなプレイヤーと並走しながら４年間かけて進化してきた。数字でみる「タマリズム」とは？

チームで参加

応募資格は 2 名以上のチーム

応募資格は大学、大学院、短期大学、高等専門学校、専門学校等の在学生で構成する２名以上のチーム。多摩地域への主体的・積極的な眼差しも要件に入る。

最高 10 万円

アイデアを形にするために

１次審査会を通過したチームには、活動支援金（最高 10 万円）を支給。ドラフト会議（最終審査会）に向けて、各チームが企画を磨き上げていった。

企画提案採点表は 100 点満点

厳正に審査

１次審査会の企画提案採点表は 100 点満点。課題解決力、実現性、地域活性化、汎用性、SDGs、創意工夫、熱意などが審査項目となった。

ドラフト会議は 12 月

年末の風物詩

マッチング会や１次審査会、実証実験等を経て、ドラフト会議（最終審査会）へ。初年度は２月開催だったが令和４年度以降は 12 月に開催した。

４年間延べ学生参加人数 508 名

有志に満ちた学生が集う

令和３年度の学生参加人数は 157 名、令和４年度は 126 名、令和５年度は 129 名、令和６年度は 96 名。４年間、有志に満ちた学生が参加した。

４年間延べチーム参加数 96 チーム

チームプレイで勝負

令和３年度の参加チーム数は 30、令和４年度は 16、令和５年度は 30、令和６年度は 30 チームが参加。団体、専門学校、大学院のエントリーも。

４年間延べドラフト会議の会場来場者数 526 名

大人も大いに注目

ドラフト会議（最終審査会）には、行政や外郭団体（観光協会等）、民間企業などが参加。審査会後、マッチングが行われ、実用化に向けた関係構築が多く図られた。

４年間

４年間かけて進化

令和３年度に始動した「タマリズム」は、毎年、行政や外郭団体、民間企業、学生に事業評価を実施。その生声（アンケート）を基に、次年度に向けた取り組みを議論し、進化させた。

ドラフト会議の発表時間 7 分

７分間に全てをかけて

ドラフト会議（最終審査会）に臨んだ学生チームの発表時間は７分間。１年間かけたプロジェクト案の集大成を各チーム、ドラフト会議当日存分に発揮した。

5 市

南多摩５市が連携

初年度から多摩市と稲城市、令和４年度からは日野市と八王子市、令和５年度からは町田市が連携。南多摩５市の担当者たちも志同じく汗を流した。

Playback!!

2021-2022

令和 3 年度

本年度より始動した「多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト」（愛称：タマリズム）は、マイクロツーリズムを「地元や近隣を含めた広義の“観光まちづくり”」と定義し、地元の魅力の再発見、地域に造詣の深い人材の発掘などを通し、地元自治体や観光協会、事業者同士の信頼関係を根づかせることにより、地域内交流人口を増やし、地域経済への貢献を目指した。その話題性も後押しとなり、参加学生は 4 年間で最大となった。

(month) (contents)

5 月 May

5 月 8 日
事前説明会 83 名

5 月 31 日
エントリー 157 名（30 チーム）

出会いを大切に

6 月 Jun.

6 月 1 日～ 6 月 14 日
マイクロツーリズム基礎講座

6 月 30 日
企画書①提出

7 月 Jul.

8 月 Aug.

8 月 3 日
マッチング会 157 名
（企業・自治体：40 団体 87 名、学生・教員：28 チーム 66 名）

8 月 27 日
企画書②提出

9 月 Sep.

9 月 3 日
活動支援金審査会 76 名［学生 67 名 / 教員 9 名（21 チーム）］

10 月 Oct.

10 月 -12 月
実証実験期間

ドラフト会議に向けて

11 月 Nov.

11 月 -2022 年 1 月
オンラインプレゼン講習会 83 名

12 月 Dec.

2022 年
1 月 Jan.

2 月 9 日
ドラフト会議（表彰式）369 名
［会場来場者 76 名（企業・自治体：24 団体・40 名 /
学生・教員：10 チーム 36 名）、オンライン視聴者 293 名］

2 月 Feb.

最優秀賞！

＜結果＞
最優秀賞：「たまらんランキング」（ECHO チーム / 明治大学）
多摩市賞：「雫のように恋をしよう！女子力 UP ツアー」（多摩に住まえば / 桜美林大学）
稲城市賞：「INstaGram ～稲城市 SNS 化計画～」（タカティーツ / 中央大学）
多摩大学総合研究所賞：「稲充多摩らん！」（元桶笠ゼミ / 中央大学）
京王観光賞：「ごちそうさまが聞こえるまち」（東京都立大観光 C / 東京都立大学）

(operation)

＜運営＞
主催：多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト実行委員会 / 実行委員会：多摩市・稲城市・多摩大学総合研究所・京王観光
事務局：多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト実行委員会事務局 / 企画：多摩大学ながしまゼミ

Playback!!

2022-2023

令和 4 年度

令和 3 年度のドラフト会議を経て、行政や外郭団体、民間企業に事業評価（アンケート）をした結果、「学生目線のアイデアが刺激になった」という意見がある一方、「『タマリズム』の周知をいっそう強化し、コンテストの質を向上すべき」という意見もみられた。令和 4 年度は取り組みの意識向上と参加意識を高めることを目的としてロゴを作成。専用 HP づくりのほか、広報・PR 活動などの情報発信を強化し、八王子市と日野市も連携した。前年度に比べて大学等の応募企画数は減少したが、新たな参加大学は増え、企画ジャンルの多様性が高まり、企業の参加数が増した。

(month) (contents)

5 月 May

5 月 7 日
事前説明会 32 名（※同日、「タマリズム」基礎講座公開）

6 月 Jun.

6 月 1 日
エントリー 126 名（16 チーム）

6 月 11 日
マッチング会 72 名
（企業・自治体：18 団体 22 名、
学生・教員：16 チーム 50 名）

7 月 Jul.

7 月 9 日
一次審査会 55 名
（学生 45 名、教員 10 名）

8 月 Aug.

9 月 Sep.

プレゼン資料ってムズかしい

10 月 Oct.

7 月 -11 月
実証実験期間

11 月 Nov.

11 月 19 日、20 日
プレゼン講習会 / 学生交流会 36 名
（学生 32 名、教員 4 名）

12 月 Dec.

12 月 17 日
ドラフト会議（最終審査会）129 名
（企業・自治体：71 名、学生・教員：58 名）

最優秀賞！

＜結果＞
最優秀賞：「山短ローズガーデンエンジョイプロジェクト～バラ園とカフェをめぐる多摩地域ウォーキング～」（Yamatan Belle Rose / 山野美容芸術短期大学）
優秀賞：「写真からつながる多摩～みんなで広げるコミュニティ～」（たまこねくしょん / 東京工科大学）
優秀賞：「一見さんおかえりなさい」（ヨコハチ∞ / 桜美林大学）
優秀賞：「東京フルーツランド！日野で季節のフルーツ頬張りツアー」（チームミックスジュース / 桜美林大学）

(operation)

＜運営＞
主催：多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト実行委員会 / 実行委員会：多摩市・稲城市・八王子市・日野市・多摩大学総合研究所・京王観光
事務局：多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト実行委員会事務局 / 企画：多摩大学ながしまゼミ

Playback!!

2023-2024

令和 5 年度

企画対象エリアを町田市まで拡大したことで企画の範囲が広がり、新たな大学から複数チームの応募があった。企業連携をイメージした実動的な内容が多くなったことで、企画へマッチングする希望団体が増えた。自治体メンターによるフォローアップにより、1 次審査会を通過した企画がフィールドワークを実施し、活動支援金の支給を受けた 10 チームが活動支援金を活用。このことが学生のコンテスト参加の満足度や報告会の充実につながった。令和 5 年度の実施結果を受け、「企画の完成度のバラつきを少なくする」「収益性の要素を高める」等、次年度の課題も浮き彫りとなった。

(month) (contents)

5 月 May

4 月 21 日
事前説明会 31 名

5 月 5 日
シンポジウム 19 名

5 月 15 日
エントリー 129 名（30 チーム）

6 月 Jun.

6 月 10 日
マッチング会 138 名
（企業・自治体：17 団体 30 名、
学生・教員：29 チーム 108 名）

その想いを明確に

7 月 Jul.

8 月 Aug.

9 月 Sep.

7 月 8 日
一次審査会 119 名（学生 109 名、教員 4 名、審査員 6 名）

10 月 Oct.

11 月 Nov.

7 月 -11 月
実証実験期間

プレゼン資料の精度 UP

11 月 19 日
プレゼン講習会 23 名
（学生 20 名、教員 1 名、講師 2 名）

12 月 Dec.

12 月 15 日
ドラフト会議（最終審査会）161 名
（企業・自治体：110 名、学生・教員：46 名、審査員 5 名）

令和 5 年度広報 PR 施策

最優秀賞！

＜結果＞
最優秀賞：「3C プロジェクト」（いいなぎサイクル / 神奈川大学）
優秀賞：「Sauna Heaven」（いなぎーず / 明星大学）
優秀賞：「たまげっさー」（まちなかリンカーンズ / 大学院混合チーム）
タマリズム特別賞：「町田四季彩の杜～竹灯籠物語～」（タマベリング / 多摩大学）

(operation)

＜運営＞
主催：多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト実行委員会 / 実行委員会：多摩市・稲城市・八王子市・日野市・町田市・多摩大学総合研究所・京王観光
事務局：多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト実行委員会事務局 / 企画：多摩大学ながしまゼミ

Playback!

2024-2025

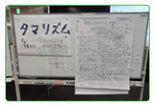
令和 6 年度

昨年度に引き続き、南多摩 5 市が連携した令和 6 年度は、参加学生数は軟調に推移したが参加大学数は 4 年間で最大となった。「タマリズム」の周知につながる広報・PR 活動が洗練され、大学や学生とのコミュニケーションが深まったことで「タマリズム」の趣旨を理解した企画が増えた印象を得た。3 年間の集大成とて、マイクロツーリズム視点の事業化に向けた取り組みも増え、初年度に掲げた「観光まちづくり」「地域経済への貢献」の一助を担う可能性を感じる 1 年となった。令和 7 年以降の本事業の成果の活用、継承方法などについても引き続き、検討していきたい。

(month) (contents)

5 月 May

4 月 26 日
事前説明会 27 名



5 月 14 日
シンポジウム 75 名
（企業 15 名、自治体 20 名、大学 30 名、その他 10 名）

6 月 Jun.

5 月 20 日
エントリー 96 名（20 チーム）

6 月 15 日
マッチング会
85 名（企業 20 名、自治体 25 名、観光協会 10 名、学生 30 名）

7 月 Jul.

7 月 13 日
一次審査会 52 名（学生 20 チーム、教員 3 名）

8 月 Aug.

9 月 Sep.

10 月 Oct.

7 月 -11 月
実証実験期間

11 月 Nov.

12 月 Dec.

12 月 16 日
ドラフト会議（最終審査会）124 名
（企業・自治体：78 名、
学生・教員：41 名、審査員 5 名）

いざ、KDDI リンクフォレストへ

令和 6 年度広報 PR 施策

最優秀賞！

＜結果＞
最優秀賞：「ビアツーリズムで多摩の魅力創出」（mprove 多摩 / 亜細亜大学）
優秀賞：「たまちけっと～チケット交換でつながる地域コミュニティ～」
（Non-Fungible Tama / 東京工科大学）
優秀賞：「タマビンゴ」（タマアド / 東京工科大学）
タマリズム特別賞「AR を使った謎解きによる地域活性化」（たまてく / 東京工科大学）

(operation)

＜運営＞
主催：多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト実行委員会 / 実行委員会：多摩市・稲城市・八王子市・日野市・町田市・多摩大学総合研究所・京王観光
事務局：多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト実行委員会事務局 / 企画：多摩大学ながしまゼミ

このページは
大学　と　企業の話

“ 産官学民 ” 連携によって駆け抜けた 4 年間！ 実行委員会事務局に聞く、「タマリズムへの想い」

都内初の産官学民連携プロジェクトとして始動。ときはコロナ禍、“ 観光まちづくり ” をテーマに「タマリズム」を企画、プロジェクトを下支えする事務局の運営も担ってきた。三者三様の想いとは？

城戸聡さん
京王観光株式会社
地域コミュニケーションチーム

永井誠十さん
多摩大学経営情報学部
ながしまゼミ

長島剛 教授
多摩大学経営情報学部

「タマリズム」は立場の異なる人それぞれが主体になれる場。

ーー「タマリズム」を企画・運営してきて良かったこと / 苦労したことは？ 自身の学びを交え、聞かせてください。

城戸　コロナ禍と今後を見据え、継続性のある地域活性化を目指すプロジェクトを興したい。こんな共通の想いをもち、多摩大学と包括連携協定を締結し、「タマリズム」を立ち上げました。長島先生の尽力により、初年度より多摩市・稲城市と連携することができ、観光まちづくりをテーマとしたプロジェクトの仕組みが整っていきました。さらりとまとめていますが、関わってくださった皆さんの熱意と行動力には目を見張るものがありました。そして何より、声を大にして賞賛したいのは、多摩大学経営情報学部ながしまゼミの学生たちです。彼ら彼女たちが 4 年間に亘って「タマリズム」の実質的な企画・運営を担ってくれました。

長島　“ 実践型の学びの場 ” という視点に立つと、学生たちは日々悩みながらも「やるならやる」精神で、責任感をもって主体的に関わってくれていたと思います。「事前説明会の司会ってどう進めればいいの？」「マッチング会のグループ分け、どうすればいいの？」「ドラフト会議の企画・運営って何をすればいいの？」ーーこんな風に、学生にとって全てが “ 初めての経験 ” です。1 年間に亘るプロジェクト中、産官学民、さまざまな立場の人とコミュニケーションを重ねるなかで “ 多くの学び ” を得ていたと思いますよ。

永井　話の主語を僕たち学生にしてくれてありがとうございます（笑）。城戸さん、長島先生が言うとおり、運営・企画を担当した僕らゼミ生は、日々悩みながら一歩ずつ前に進み、成長してこれたと思います。僕に限っていうと、当初は “ 学チカ ”（註：学生時代に力を入れたこと）として「タマリズム」に関わりたいと手を挙げたけれど、実際に深く関わるようになるにつれ、その想いは薄れていきました。そんなことより、プロジェクトを前に進めていかねば、と。“ 実践型の学び ” を尊ぶゼミなので、学生一人ひとりの主体性が問われました。いまは次年度のリーダーを誰に任せるべきか、大いに悩んでいます（笑）

“ 3人にズバリ聞いてみました ”

あなたにとって「タマリズム」とは？

地域共創のイントレプレナー

↓

主体的に企画・運営に関わり、多摩地域の新規事業プランのコンテストを下支えする、“ 地域共創 ” の一助を担うことができたので。

新しい自分を発見できる場

↓

「タマリズム」の企画・運営に携わる中で、自分自身のリーダーとしての才覚、司会する力など、得意なことに気づくことができたので。

仕組みづくり入門

↓

プロジェクト実装の時、いちばん大変なのは裏方で、裏方の頑張りがあってこそ仕組みはまわる。その大切さをゼミ生が学べたので。

城戸　「タマリズム」は大学生などにより構成したチームを対象に、多摩地域のマイクロツーリズムの企画を公募するコンテストです。主役はコンテストに参加する学生たちですが、私たち実行委員会事務局メンバーにとっては「タマリズム」を下支えする永井くんのような学生たちも主役だと思っています。皆さんの奮闘する姿をみて、私たち大人も襟を正し、4 年間という歳月をかけながら「タマリズム」を進化させてきました。私個人の想いを振り返ってみると、多摩地域の新規事業プランのコンテストを下支えする一助を担うことができたと感じています。

長島　大きな視点でみると、4 年間の「タマリズム」を通してマイクロツーリズムによる多摩の観光振興の可能性を提示できたのでは、と思っています。大学や自治体、企業の枠組みを超え、学生のアイデアをブラッシュアップして事業化に至った企画もありました。私のゼミ生にとってもコンテストに参加した学生にとっても「タマリズム」は “ 仕組みづくり入門 ” になったのではないでしょうか。

学生が主体となって運営！

多摩大学ながしまゼミによる「タマリズム」の 1 年間とは？

- 令和 6 年度 -

4月	5月	6月	7月	12月（最終審査会）
事前説明会	**シンポジウム**	**マッチング会**	**1 次審査会**	**ドラフト会議**
裏方に徹し、ゼミ生が主体的に「タマリズム」を運営。心をひとつにし、当日の司会原稿をはじめ、毎年、ゼロから作り上げた。	多摩地域のまちづくりに興味のある企業・団体を招き、当日の進行と概要説明を担当。企業や自治体との事前やり取りも行った。	ゼミ生で役割分担し、司会と運営を担当。意見交換する学生チームと企業、行政のグループ分け、当日サポートの全領域を担った。	1 次審査会には 11 大学 19 チームの学生が参加。審査員による質疑応答に向け、当日の企画・運営をゼミ生が担当した。	ゼミ生 11 名が携わり、南多摩 5 市、京王観光と連携。開催に向けて企業や自治体に連絡し、当日の企画・運営を行った。

このページは
自治体の話

“ 南多摩 5 市 ” 座談会
「タマリズム、ここが良かった / 苦労した」

「タマリズム」の主役は学生たち。そんな彼ら彼女たちと近い距離でコミュニケーションを重ねてきたのが自治体職員たちだ。メンターとしての役割をどう考え、プロジェクトを進めていったのか？

メンターってムズかしい。自治体職員だからこそ、できることもある。

ーー「タマリズム」に参加して良かったこと / 苦労したことは？ 自身の学びを交え、聞かせてください。

川田　未来ある学生と関われること。これが私にとっての「タマリズム」の魅力ですね。学生たちと密にコミュニケーションできるのは、自治体という立場だからこそ。民間企業から多摩市に転職したこともあり、民間では学生たちとこんなに関わりを作るのはムズかしいなぁと思っていました。寄り添えるっていう表現のほうが近いかもしれないです。

大貫　私たち自治体は学生たちのメンターとしての役割を担っていたけれど、担当するチームによって “ タマリズムにかける思い ” はさまざまでしたよね。「このプロジェクトをビジネスにしたい」というチームもあれば、ゼミの延長で取り組むチームもいる。温度感の違いを容認しつつも、コンテストにエントリーにするからには何かしらの学びを得てほしい。川田さんが言うように私も、学生たちがやりたいことの実現に向け、日々のコミュニケーションは前向きな言葉を投げかけていた気がします。通常の業務とは少し違う、新鮮な機会でした。

富澤　ぼくの場合はふたりほど、手をかけずに学生と接していました。アイデアを聞くにつけ、「こうしたほうがいい」という考えはあったけれど、あまり手を出しすぎずに学生の自主性を尊重するスタンスでした。他方、反省点もあって、もう少し早く助言すべきだったと思うこともありました。メンターの役割を ” 社会実装を目指すために適切に助言できる人 ” とすると、事業化視点のアイデアをどこまで誘導していくべきか、ムズかしいと感じる場面がありました。

石寺　前任から引き継ぎ、令和 6 年度から「タマリズム」に関わることになり、私も皆さんと同じようにムズかしいと感じる場面が多くありました。ポジティブに話をするなら、メンターとしての力量が問われている “ 貴重な機会 ” ということもできるけれど、学生たちの自主性を尊重するあまり、なかなかうまく進まないこともあって。そんな時は初心に戻り、地域課題の解決に向けたマイクロツーリズムの企画なんだと、観光推進の本質について考え、その思いを分かりやすく学生に伝えるように心がけました。

安藤　皆さんそれぞれ、苦労しながらも自身の学びにつなげていたんですね。ぼくについて言えば、「タマリズム」に 3 年間関わってきました。令和 4 年度は 4 チーム、次年度は 2 チーム、令和 6 年度は 2 チームのメンターを担当。年度ごとに学生が変わるので、必然的に各チームへの関わり方も変わっていきました。参加して良かったなぁと思うのは、チームごとにアイデアに独自性があり、いつも新鮮だったこと。自治体職員である我々は、実証実験への関与がいちばんの比重になると思うんですが、プロセス中にうまくいかないことも含め、通常の業務とは違う学びがありました。無事に終了した時の達成感というか、安堵感というか。安堵感のほうが大きいですね。

川田　その気持ち、私も共感できます。きっと皆さん、似たような気持ちだと思います。令和 6 年度に担当したチームで、やる気はあるんだけど話し合った内容をなかなか企画書に反映できないチームがいて。「どう進めていけばいいかなぁ」という感じでした。そんな中、実証実験の当日を迎えることになりました。結果からお伝えするとやり遂げてくれたんです。学生たちが積極的に通りがかりの人たちに声をかけ、ワークショップを無事カタチにしてくれて。最後まで諦めず、やり抜く姿勢が素晴らしかった。こういう場に同席できるところがメンターの醍醐味なのかもしれません。

富澤　学生と接する中で感じたのは、いまの学生はすごく真面目だなぁということ。「タマリズム」に参加するぐらいなので意欲のある学生が多かったと思います。残念ながらコンテストには引っ掛からなかったけれど、その事実を受け止め、次に進んでいくチームもいて。そのチームは令和 6 年度に民間企業と連携してモニターツアーを行なったんですよ。

石寺　諦めない姿勢、素晴らしいですね。アイデアを事業化したいと真剣に考えるチームがいまより増えると、さらに盛り上がっていく気がします。私たち自治体職員も「やるからにはやる」という覚悟が必要ですね。

川田　「タマリズム」で創出した企画は、つくって満足ではなく、つくって使ってもらうところまでが大事だと思います。社会との接点を多様に育める実証実験を通し、その大切さを学生たちに感じ取ってもらえたら、メンター冥利に尽きますね。

大貫　私たちの関わり方、学生たちとのコミュニケーションの仕方を含め、まだまだできることはありますね。自治体だからこそもっとできることがある……この気持ちを忘れず、次に進んでいきたいです。

参加した自治体と年度

2021-
令和 3 年度～
多摩市　稲城市

→

2022-
令和 4 年度～
日野市　八王子市

→

2023-
令和 5 年度～
町田市

私にとっての「タマリズム」は…
「多摩の発展」
舞台は南多摩 5 市。観光まちづくりをテーマに、地域課題をアイデアで乗り越えようとするプロジェクトなので。

八王子市
富澤勇介さん
産業振興部 観光課

私にとっての「タマリズム」は…
「未来への関わり」
未来のある学生たちに “ まちの未来 ” を見せてもらっている。自治体にとっても多くの学びがあったので。

多摩市
川田由美子さん
市民経済部 経済観光課

私にとっての「タマリズム」は…
「やる場所」
学生たちが挙げた企画はどのようなものであれ、必ず前に進めていくので。この事業ならではだと感じている。

稲城市
石寺真由子さん
産業文化スポーツ部
観光課

私にとっての「タマリズム」は…
「実験の場」
さまざまなアイデアを実際にやってみる。実証実験への関与度はいちばんの比重になるプロジェクトなので。

日野市
安藤順俊さん
産業スポーツ部 産業振興課

私にとっての「タマリズム」は…
「反省の場」
メンターの役割を考え続ける期間だったので。「もっとできることがあったはず」という自戒の念も込めて。

町田市
大貫安さん
経済観光部 観光まちづくり課

Voice 1

活動支援金審査会がなければ私たちは充実した活動を行うことはできなかった。支援金をもらうことができなかったチームがどのように活動していたのか気になる。

Voice 2

実証実験はかなり簡素なものでも収益があるとみなされれば、評価が高くなるという事実を早く知りたかったです。実証実験だからと集客を図る目的でイベントを組み立ててしまったが、事業化を目的として収益を上げる仕組みを構築すれば良かったです。

Voice 3

「近くて遠い」多摩地域の魅力を発見できた。基礎的な発表機能の向上にもつながりました。

Voice 4

良い学チカになった。

Voice 5

基礎講座は生配信ではなかったため、忙しくてもスキマ時間に目を通すことができたことが良かった。

Voice 6

活動資金など、ただのゼミ活動ではなかなか行えないことまで手を出し、本格的なツアーを企画することができ、嬉しかったです。

Voice 7

企業や自治体と打ち合わせや意見交換などの交流を通して、学生だけでは考えられなかった視点に気づくことができたり、提案力を身につけることができたことは大変良い経験になりました。

Voice 8

企画やフィールドワーク、実証実験など初めての経験ばかりでしたが、学ぶことが多くとても楽しかったです。

Voice 9

プレゼン講習会はプレゼンの仕方ではなく、どのように資料を作るのかを知りたかったです。講習会を行う前に事前資料を提出して、その添削をしていただいた方が有意義な気がしました。

Voice 10

マッチング会は、自分が想像していたよりも多くの企業に参加していただき、直接企画の良い点や悪い点を教えていただけたことで企画改善につながり、モチベーションも向上した。

Voice 11

ツアー企画の大変さを実感しました。

4 年間延べ 508 名が参加！

“学生の声”まとめ

「タマリズム」の主役は学生たち。彼ら彼女らは 1 年間のプロジェクト中、どんなことを感じていたのか。ここでは象徴的な生声を紹介！

事業化したプロジェクト

多摩観光推進協議会が考える「タマリズムの可能性」

同時代を生きる、若い世代のさまざまな考え方を知る ” 貴重な機会 ”。こんな思いを持ち、さまざまな形で下支えしてきた多摩観光推進協議会に聞く、「タマリズムとの 4 年間」とは？

お話を伺いました →

駒治徳さん

多摩観光推進協議会 事務局長

「東京・多摩の観光を促進！」をテーマとし、多摩の観光ルート開発や古民家再生、マップ制作、SNS による情報発信など、さまざまな事業に取り組み、多摩地域の魅力を PR 中。

地域活性につなげたい。助成事業で「タマリズム」を下支え。

多摩地域の観光振興・観光ビジネスの創出を目的として設立した「多摩観光推進協議会」。多摩地域の商工会や観光協会、地域金融機関等と広域連携し、「東京・多摩の観光を促進！」をテーマとして、これまで多摩の観光ルート開発や古民家再生、マップ制作、SNS による情報発信など、さまざまな事業に取り組み、多摩地域の魅力を PR してきた。

初年度から「タマリズム」に深く関わり、同プロジェクトを「後援」、ドラフト会議（最終審査会）の「審査員」として駒氏も名を連ねた。

「『タマリズム』を立ち上げる話を聞いた時、マイクロツーリズムに焦点を当て、次代を担う学生によるアイデアをもとに事業化を目指すという考えに、とても共感しました。若い世代のさまざまな考え方を知る、貴重な機会になりますから」

2 年目の令和 4 年度に入ると、コンテストで表彰を受けた事業のうち、民間事業者による事業実施の可能性のあるマイクロツーリズムツアーの「助成」を開始。事業化イベントの「主催」など、さまざまな形で「タマリズム」を下支えした。

「学生の立場で考えると、自分たちが提案した企画が事業化する可能性があると知れば、モチベーションアップしますよね。実際に民間事業者と学生による共同プロジェクトとして提案内容が次のステージに進むと、学生たちの顔つきが変わる様子も多く見ました。私自身、現場第一主義なので、私たち協議会が助成したモニターツアーには多く顔を出しました。見て食べて経験して――こんな思いを大切にし、地域活性化につながる持続性のあるプロジェクトなのか、3 年間に亘って見定めてきました」

令和 4 年度は「多摩で日帰り海外旅行」「雫のように恋をしよう！女子力 UP ツアー」「たま公園ロゲイニング」、令和 5 年度は「八王子のバラ園を専門家と巡るモニターツアー」「日野のフルーツ頬張りモニターツアー」「桑の都・八王子 着物着付け・芸者遊び体験モニターツアー」。令和 6 年度は「稲城ロゲイニング 2024」など、多摩観光推進協議会による助成事業はさまざまにあった。

「マイクロツーリズムツアーを民間事業者のモニターツアー事業として実施したことで、多くの気づきを得ることもできました。地域のコンテンツを発掘する・磨くという視点で話すなら、マイクロツーリズムは地元の人やガイドとのコミュニケーションや、生の声・情報が参加者にとって非常に有益で、ツアーガイドの質がマイクロツーリズムの価値に寄与することが明らかになりました。他方、事業化に向けた取り組みとしてガイドの育成やガイド事業の収益化が必要となり、それをツアー単価に適正に反映すべきという課題も浮き彫りになりました。インバウンドへのコンテンツ提供という視点では、映画やアニメなどの訴求力の高いコンテンツを高単価で提供するためにはどんなツアーを創出するべきか、こんな課題も見えてきました。『タマリズム』の基点は学生のアイデアです。そのアイデアをベースに、民間事業者がどうブラッシュアップしていけるのか。私はワクワクしています」

実施したモニターツアーの例

多摩で日帰り海外旅行
開催日：2023.2.14、2.15

雫のように恋をしよう 女子力 UP ツアー
開催日：2023.2.17、2.18

たま公園ロゲイニング
開催日：2023.2.23

八王子のバラ園を専門家と巡るモニターツアー
開催日：2023.10.14

日野のフルーツ頬張りモニターツアー
開催日：2023.10.26

桑の都・八王子 着物着付け・芸者遊び体験モニターツアー
開催日：2023.11.15

団体の話　このページは

事業化したプロジェクト

町田市観光コンベンション協会×東京家政学院大学

「花の色」「花言葉」で四季彩の杜で「推し活」を

『植物図鑑で推し活？』『花をアイドルに擬人化？』ーー私たちの発想にはない、面白い。「タマリズム」という枠を飛び越えて実現した、町田市観光コンベンション協会の取り組みとは？

お話を伺いました →
坂本愛さん
一般社団法人町田市観光コンベンション協会
「自然・歴史・文化・産業を活用した心豊かな観光まちづくり」を目指し、町田をＰＲするための媒体発行、観光案内などを通し、観光プログラムを展開する地域の担い手。

写真左：大学チームはプロジェクトの始動中、何度も四季彩の杜を訪れた。右：全施設が集まる協議会のプレゼンも学生が行った。

1 次審査会には落ちたけれど…。両者の熱意でプロジェクトを始動

令和 4 年度の最終審査会への参加を経て、翌年度より「タマリズム」に本格参加した町田市観光コンベンション協会。観光プログラムの担い手として町田市を PR する協会だ。

「タマリズム」での出会いをきっかけに、町田市観光コンベンション協会×東京家政学院大学による共同企画「四季彩の杜の植物の魅力を伝えるプロジェクト」は始まった。

「四季彩の杜の植物とオタ活を組み合わせた企画で四季彩の杜に若い人を呼びたい。令和 5 年度の『タマリズム』のマッチング会で同大学チームとの接点はなかったけれど、後日、学生さんから前述のような内容の電話があり、話してみることになりました。『若い人を呼び込みたい』という市と協会の思いを伝えたところ、学生さんから『若者の間で“推し活”がいま流行っていて、推しのアクリルスタンドを持参して撮影する人もいます。推しのためならお金や労力を惜しまないので、四季彩の杜にある植物の花色や花言葉を使って公園を舞台に“推し活”するムーブメントができたら若い人が来るのでは？』という返事が返ってきました。その話を聞き、花の多い四季彩の杜ならではの独自性のある新しい切り口として“推し活”の共同企画の実施に至りました」

冊子の配布は令和 6 年 4 月に決定。協会はその後、2 人の学生とのコミュニケーションを重ねていった。

「令和 5 年 8 月からプロジェクトを始動し、四季彩の杜に咲く花をテーマに、花の色や花言葉に着目し、冊子づくりを進めていきました。季節ごとに四季彩の杜で見頃となる植物を選定することからスタートし、花を見られる場所やおすすめのフォトスポットも学生たちと一緒に決めました」

立ち寄りおすすめスポットにはスタンプを設置。規定の数を押印すると、花をアイドルに擬人化したオリジナルトレーディングカードをもらえる仕組みにしたりと、アイデアは広がっていった。TikTok による周知活動も学生たちの声から実現に至ったのだった。

「イラストは学生たちの思いを尊重し、人気イラストレーター・はしゃさんに描き下ろしてもらいました。冊子は四季彩の杜内の 10 施設で無料配布することに決め、全施設が集まる協議会でのプレゼンも 2 人にお願いしました。制作プロセスの道中、彼女たちの課題や就活と重なってスケジュールどおりに進まないこともありましたが、最後まで粘り強く進め、無事フィニッシュすることができました。1 年を通してたくさんの人に四季彩の杜の花を楽しんでいただいています」

プロジェクト

「四季彩の杜の植物の魅力を伝えるプロジェクト」の制作物。冊子の部数は 3000 部。四季彩の杜内の 10 施設で無料配布中。

企業の話　このパートは　# 事業化したプロジェクト

グラン・グルメ×山野美容芸術短期大学

「ビューティー弁当」「ローズシロップ」を共同開発

出会いは「タマリズムコンテスト」のドラフト会議。学生の熱意にさまざまな形で応えたわけは？

お話を伺いました →
國枝雄太さん
グラン・グルメ株式会社
多摩 CK 長 生産本部生産部 次長
グラン・グルメは、割烹料理店からはじまった「味」と「彩」を大切に委託給食事業から仕出し弁当、配食サービスまで、社会から必要とされる料理製造会社を目指している。

ほんのりローズが香る「ビューティー弁当」。学生たちの要望に応え、曲げわっぱの弁当箱にはかわいらしいデザインを施した。

学生の熱意に応えたい。この一心で“美道”をテーマにした商品を開発

「多摩セントラルキッチン」の運営など、安心・安全・快適な食事を提供するグラン・グルメ。「食」と「教育」の連携で地域社会貢献活動にも積極的な企業だ。生産本部に席を置く國枝氏は、多摩地域の大学と“産学連携”を育む人だ。

「グラン・グルメは、令和 4 年度から『タマリズム』に参加しています。同年のドラフト会議で『Yamatan-Belle-Rose』（山野美容芸術短期大学）と名刺交換し、翌年初めに学生さんから連絡をもらい、これまで関係を育んできました」

最優秀賞（令和 4 年度）を受賞した『Yamatan-Belle-Rose』のテーマは、ローズを介した八王子の活性。ローズガーデンマップやバラの小冊子制作などに取り組む中、2 年の月日を経てグラン・グルメと話を進め、「ローズシロップ」「ビューティー弁当」の開発に至り、商品は「はちおうじ NPO フェス」や「山短祭」で販売された。

「学生たちの熱意に応えるため、食用バラを栽培する農家のリサーチをはじめ、ローズの花びらのてまり寿司に合う曲げわっぱづくりなど、定期的なコミュニケーションを重ね、“美道”の名にふさわしい商品を開発しました。令和 5 年秋には『Yamatan-Belle-Rose』の指導教員のお誘いで、山野美容芸術短期大学で 4 回授業をさせていただいたんですよ」

企業の話　このパートは　# 事業化したプロジェクト

多摩信用金庫×大学院混合（まちなかリンカーンズ）

「ひのうまいもん大図鑑」とコラボ

リアル謎解き＆フォトラリーゲームにアレンジ

若い世代と共に、共創の視点で”新しい風”を育みたい。こんな風に考える地域金融機関の一手とは？

お話を伺いました →
和田奈美さん
多摩信用金庫 価値創造事業部
地域支援グループ 地域創生担当

情報発信サイト「共創たまちいき」公式 HP

持続可能な多摩地域を創っていくため、多摩地域の企業・事業者や地方公共団体、教育機関等との連携を進め、地域の課題解決に取り組む。

写真左：令和 6 年 10 月 5 日に開催した「たまげっさー」のポスター。右：当日は学生が主体となり、特設ブースで接客した。

「ひのうまいもん大図鑑」公式 HP

舞台は日野市。学生チーム、日野市と連携してイベント開催

地域情報誌『広報たまちいき』（現・web サイト『共創たまちいき』）での取材をきっかけに、「タマリズム」に参加した多摩信用金庫。地域金融機関として多摩地域の課題解決に取り組む同行にとり、地域特性を生かしたマイクロツーリズムに焦点を当てて若い世代の発想に着眼した「タマリズム」は、共創の“新たな風”となった。

「令和 5 年度のコンテスト優秀賞受賞企画、大学院生混合チームによる『たまげっさー』と共同し、翌年、事業化プロジェクトを行いました。日野市内の人気店を集めた『ひのうまいもん大図鑑』とのコラボ企画とし、リアル謎解き＆フォトラリーゲームにアレンジ。日野市協力のもと、本企画を考案した日本女子大学学生チームとコミュニケーションを重ね、『ひのよさこい祭り』の日に『たまげっさー』を開催しました」

街歩き探索ゲーム「たまげっさー」の参加店は日野市内にある 8 店。開催に先がけた各店舗への説明は学生が主体となって行い、企画書の格子も学生が作った。

「当日は残念ながら荒天でしたが、特設ブースの受付は学生が担当し、ゲームに参加する地域の方々と密にやりとりする姿や関係各先との協力が形になることが共創の一歩だと思います」

大学の話　このページは

令和６年度「タマリズムコンテスト」最優秀賞

いいなぎサイクル「3C プロジェクト」舞台は稲城市、規格外の梨をプチ名物にする

とにかく行動しよう。こんな思いを尊び、地域住民とのつながりを育んでいった神奈川大学「いいなぎサイクル」。指導教員・石濱准教授が大切にした、学生視点の学びとは？

お話を伺いました →

石濱慎司さん

神奈川大学経営学部国際経営学科（体育）准教授

石濱ゼミのテーマは「スポーツを科学する」。スポーツ選手のサポート、地域の祭りやこどもキャンプなど、イベントにも積極参加。ゼミ生各人が自由な発想で多様なテーマに取り組む。

祭りやキャンプにも積極参加。学生が育んだ“地域とのつながり”

令和５年度の「タマリズム」に初参加し、同年、最優秀賞を受賞した神奈川大学「いいなぎサイクル」。“3C プロジェクト”と題した企画には、「運動（cycling）」「食（cooking）」「コミュニティ（community）」という３つの観点への思いが込められている。舞台は稲城市、「規格外の梨をプチ名物にする」ための取り組みとなった。

「『タマリズム』のテーマは多摩地域の郊外住宅型都市の課題を踏まえた観光街づくりです。ゼミ生と話し、フィールドを稲城市に設定し、企画テーマを考えることからはじめました。『まずは行ってみよう！』。実際に学生たちは稲城市内を歩き、稲城市の良いところや市の課題をまとめていきました」

稲城市の良さは「ほどよく田舎、ほどよく都会なまち」、「市民に自然環境、生活環境の良さを感じている人が多い」ところ。フィールドワークの結果、「豊富な水資源や梨・ブドウなどの果樹栽培が盛んな地域」であることも分かった。

「稲城市の名物は梨です。生産者梨農家を訪れてインタビューした際、梨の重みや風など、さまざまな要因で落ちてしまった梨が土に埋められ、規格外品が発生していることを知りました。『農家の方の生産に対する熱意を伝えよう』ー学生によるこんな思いを着想の原点とし、学生が主体となり、最終審査会に向けた検証を重ねていきました」

大切にしたのは地域住民との信頼関係。「いいなぎサイクル」メンバーは、地域の祭りやキャンプに参加して市民と積極的にコミュニケーションを図り、農家から店頭に並ばない規格外品の梨を譲り受けた。

「ビアマルシェへの参加、親子クッキング会の開催など、稲城市内で検証を４回行い、地域の方々との交流を育めることができたのは、学生たちにとって学びになったと思います。規格外の梨を使ってプチ名物を考案し、地域の方々に食べてもらい、子どもたちへの食育として地域に還元させる取り組みができたことも、学生の自信につながったと思います。『3C プロジェクト』という活動を通し、農産物のもともと持っているポテンシャルを生かし、価値をさらに高めることができれば、稲城市の６次産業をさまざまな形でサポートできると、学生たちと話すこともできました。学生が地域の中に入ると、地域の方々が面白い見方をしてくれることは、私自身の学びになりました」

検証

① **南武線稲城長沼駅 ビアマルシェ**

目的はプチ名物の企画・販売。稲城市観光協会と協働し、梨とウインナーのパターソテーを考案し販売し、２日間で300 食以上を売り上げ完売。

梨とウインナーのパターソテー

② **親子クッキング会**

目的は地域の輪を作ること。榎戸祭りやキャンプでつながった親子を招待し、SDGs クイズを通して梨の現状を伝え、子どもたちと一緒に梨とウインナーのパターソテーと梨ジャムづくり。

③ **インクルーシブイベント**

機材の準備を含め、できる限り自分たちの力でイベントを実施。キッチンカーの一部を借り、すりおろした梨をソースとあわせた梨風味焼きそばを販売し、100 食を完売。

④ **イルミネーション点灯式**

企画継続に向け、稲城市民による自走を大切と考え、高校生にレシピなどを監修して梨風味焼きそばを販売。30 食を売り上げた。

大学の話　このパートは

令和６年度「タマリズムコンテスト」最優秀賞

舞台は多摩地域のブルワリー ビアツーリズムで多摩の魅力創出

令和６年度に初参加し、最優秀賞を受賞した「Improve 多摩」。なぜビアツーリズムをテーマに？

お話を伺いました →

髙石光一さん

亜細亜大学経営学部経営学科 教授

「事業創造とマネジメント」をテーマに、実践的な学びを行う髙石ゼミ。ゼミ生を中心とした学生有志による「亜細亜大学ホッププロジェクト（AUHP）」などの活動も行っている。

「Improve 多摩」のメンバーはチームに分かれ、多摩地域周辺にある 10 ヵ所ほどのブルワリーを現地調査。オーナーと話をして多くの生声を拾い上げた。

多摩地域の現状と課題を分析し、ビアツーリズムというテーマを創出

多摩地域には多くの個性的なブルワリーが集積していることから、ビールと旅をかけ合わせたイベントやツアーを考案し、経済効果や３年間の事業計画などを提案した「Improve 多摩」。メンバーは８人、髙石教授のゼミ生だ。

「多摩地域の現状と課題を分析することからスタートし、学生たちが主体となって取り組めるテーマを創出しました。令和４年度から『亜細亜大学ホッププロジェクト（AUHP）』を始動していたこともあり、学生たちにとってクラフトビールは身近な存在でした。自分たちの強みに“多摩地域の活性化”という視点を加え、ビアツーリズムで多摩の魅力度をアップさせるアイデアに至りました」

「Improve 多摩」の提案は、多摩クラフトビールマップ、多摩クラフトビールツアー、ホップ・ビール醸造体験。ビアツーリズムの経済効果も算出した。

「私のゼミでは実践的にチャレンジする姿勢を大切にしているので、学生たち自らが調べ、多摩地域周辺にあるブルワリーにアポイントを取り、10 ヵ所ほど調査に行きました。現地ではブルワリーのオーナーの皆様と直接話をし、事業視点での設備費やマーケティングの難しさなどを学ぶ機会となりました。１年間の活動を通し、学生たちは自ら動き、考える大切さを学ぶことができたと思います」

大学の話　このパートは

ICT は日進月歩

「タマリズム」での学びを通し、新しい仕組みを考えて欲しい

４年間に亘って多くの学生チームを下支えした細野教授が考える「タマリズム」の魅力とは？

お話を伺いました →

細野繁さん

東京工科大学コンピューターサイエンス学部 教授

細野教授によるサービスシステムデザイン研究室では身近な社会課題を題材とし、顧客の価値をサービスシステムとして具体化し、設計方法論、ツール、実践プロセスについて研究開発。

令和６年度の最終審査会で学生３チームが優秀賞、特別賞を受賞。写真はドラフト会議で発表を行う３チームの様子。

「タマリズム」は多摩地域をフィールドとした“実践の場”

初年度から「タマリズム」に参加し、指導教員として４年間に亘って多くの学生チームを下支えしてきた細野教授。令和６年度の最終審査会では学生３チームが優秀賞、特別賞を受賞。多摩市、日野市、稲城市の市役所観光課と地域の施設・商店と協働し、新たな観光まちづくりを目指すアプリケーションを開発して実証を行なった。

「私の研究室では身近な社会課題を題材にし、プロジェクトベースの研究開発を進めています。モットーは“アイデアをカタチに”。発想したアイデアをいかにきちんとカタチにできるか、研究室では全体の分析をし、アイデアを出してそこからコンセプトのデザインをし、開発に進みます。『タマリズム』は多摩地域の課題を見つけ、課題解決に向けたアイデアを創出するところからスタートするので、学生にとっての“実践の場”になりました」

タマリズム特別賞（令和６年度）受賞の学生チーム「たまてく」は、AR（拡張現実）体験をしながら稲城市の魅力を再確認できるクイズラリーを創出した。

「稲城市の地域課題を考えることからはじめ、実証実験として AR 技術を活用した謎解きイベントを行いました。地域の方々の生声に多く触れることができたのは、学生たちの財産になったと思います」

「みんなの想い」を次のステージへ。

地域資源を掘り起こし、学生発の「マイクロツーリズム」企画を“多摩観光の新定番”に。こんな想いをもち、令和３年度に始動した「タマリズム」は、都内初の産官学民連携のプロジェクトとして、４年間という時を経ながら進化してきた。

その中心にいたのは次世代を担う学生たち。南多摩地域の課題や地域ならではの魅力に焦点を当てた「タマリズムコンテスト」では毎年、大人では考えつかないバラエティに富んだアイデアが育まれ、事業化に漕ぎつくアイデアも多く生まれた。

舞台は多摩地域、４年間に亘って育まれた「みんなの想い」は次のステージに向かいます。

To The Next Stage...